

「止揚学園を訪ねて」

よく食べ、よく寝て、よく笑う人。

* 知能に重い障害をもつ人たちの生命を、自分の生命のように大切にし、真剣に向き合ってくださいの方。

* 素晴らしい技術や強い人間の力をもたなくても、豊かな温かい心をもった方がおられ ましたら、おいで下さい。

止揚学園ホームページの「求人票」には処遇内容、採用条件などの他に、「その他」として上のように書いてあった。「知能に重い障害をもつ人たちの生命を、自分の生命のように大切にし、真剣に向き合う」とはどういうことか。秋晴れの美しい日、水曜集会の仲間4人で止揚学園を訪ねた。

その時間いた一つ一つの言葉、見た一つ一つの場面、不思議なほど私の心に鮮明に刻まれたものを、いくつか、そのまま書いてみたい。(メモ一つとっていないので、話して下さった言葉のままではないかも知れません。違っていたらごめんなさい)

「私たちは美しく優しい場所を用意して、祈りながら、待つのです。」

楽しい絵いっぱいのトイレは、いつでもそこに自分のお布団をひいて寝てもいいように、机をおいて本を読んでもいいように、学園で一番美しい場所であるようにお掃除をするという。そんなトイレを想像することは難しいけれど、その言葉が決して大げさでないことは、すぐに分かる。普通、トイレにはいると、荷物をどこに置こうか、どこに引っ掛けようかとキョロキョロするが、学園のトイレでは、何の迷いもなく足下に置いた。畳の上に置くように。ソファーの上に置くように。

学園に入園して、始めはトイレを使えない人が多いという。オムツのまま来

る人もいるという。その人たちがトイレで用を足せるようになるまで、暖かな下着、真っ白な気持ちの良いお布団、その人その人にふさわしい食べ物、適切な声かけを続けながら、そして何よりも祈りながら、ひたすら待つのだという。

「ほら、この頃はトイレに消音器とかいうのがあるでしょう。何でもったいな
いって思うんです。私たちにとっては、この子たちのおしっこの音は、わあ、
うれしいって、喜びなんですから」「うんちだって、いやなおいなんかじゃない
い、私たち、いい香りっていうんです。これはにおいなんかじゃないね、香り
だよねって。ほら、お母さんが自分の赤ちゃんのうんちを、汚いなんて決して
思わないように。」そう話してくださる方の喜びに満ちた表情が、人間にとって
真の喜びとはこういうものだ、優しく物語っているようだった。

なるほどこれが、知能に重い障害をもつ人たちの生命を、自分の命のように
大切にし、真剣に向き合うということなのか。言葉とは行いを伴ってはじめて
真実となる。福井達雨さんが講演の中で話されていたことを思い出す。

「あやまるということは、ごめんなさい、すみませんと、この頃はやってい
るように頭を下げることではないと思いました。あやまるということは、あや
まったことを次にどのように行動に示していくか。行動の伴わない、祈りや聖
書、あやまりなんて、とても虚しいと思いました。やさしい愛、やさしい心は、
きれいな言葉ではなくて、聖書や祈りを通して生まれた行動から生まれるんじ
ゃないかと。」

若き日に、天井裏や土間の穴に押し込められた知能に重い障害をもつ子ども
たちに出会い、そうさせているのは周囲の冷たい日本人なのだと、その中に自
分もいたと気づいた時、その人たちにあやまらないといけないと思ったという。
福井さんにとってあやまるとは、ことばではなく行動だった。「差別してきた私
たちが差別をされた人たちに謝ろうと止揚学園が生まれました」。その日から、
止揚学園は、この子どもたちを1人の人間として存在を認めるだけでなく、社

会の中で、全ての人間の輪の中で、共に生きる世界が生まれることを願い、祈り、行動し、信じて待ち続けているのだ。

愛 それは言葉ではなく 汗を流すこと

愛 それは言葉ではなく 支え合うこと

すべての喜びを 共に分け合い

悲しみ苦しみを 共に歩むこと

白いマーガレットの花束のような洗濯物。その洗濯物に囲まれて、ニコニコと、うれしそうにたたんでいる女性がいた。下着も上着も、くつしたもハンカチも、一つ一つに名前が刺繍されている。淡いピンク色で「まりこ」と刺繍された肌着。水色で、黄色で、その人の好きな色で、その人のために選んだ、すべてのものに。

「この人たちは、シャツがほつれたりすると、『シャツが病気』って言うのです。だから、丁寧に繕って『治ったよ』と手渡すと、新しいものを買うより喜ぶんです。衣類は肌につけるものだから、私たちの温かい心が伝わるように、一枚一枚刺繍をしたり繕ったり、洗濯をしたり、この仕事は必ず職員がします。他の誰にもお願いすることはありません。

あの美しく整えられた衣類のお部屋、40人近くの洗濯物を丁寧に重ねた一人一人の棚、引き出しの中で整列して出番を待っているようなくつ下たち。(心に焼き付いたあの情景が今も私に、怠惰は愛の正反対だと教えてくれます)

運動場の隣は野菜畑、青々とした葉っぱをつけた大根の前でのお話しも忘れられない。「畑の草をとったり苗を植えたり、私たち職員がすれば一時間でできてしまうけれど、もし一時間でやってしまうと、ここでは『さぼった』って言われるんです。仕事が片づくことより、みんなで一緒にすること、何時間かか

っても、汗を流すのも、収穫の喜びも、みんな一緒に。それが共に生きると言うことですから。

貼り絵をする時も、絵をはっている人、その枠を支えている人、まわりを歩いている人、みんなで絵を描いているんです。お菓子をつくるのも、手で丸める人、うれしそうに見てる人、みんなでクッキーを作ってるんです。みんながいるから、やわらかな美味しいクッキーが焼けるのですから。」

この世には、体力のある人、ひ弱な人、知能がたくさんある人、お年寄り、障がいのある人、子どもたちといろいろな人がいて、一人として同じ人がいないのは、その人たちが、みんなで力を合わせて、共に生きるため。「それが愛だ！」と天からの光りのように心に届いた。

園内を見学する間、何人の方が、あふれる笑顔で「こんにちは」と声をかけてくださったことだろう。儀礼でなく、習慣的にでもない。「今、あなたに出会えてうれしい」と語りかける笑顔。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」との御言葉は、美しい標語ではなく、弱い人を中心にして祈りを合わせ、みんなで共に生きる時、人はそのように生きることが許されるのだと、今、清い喜びが満ちてくる。